

ひかりのこ

7月園便り

聖ミカエル幼稚園

2016年6月21日

月主題：ふれて

私は、昨年から教育大学の大学院に通い、臨床心理を専攻しています。先日の講義では、この大学院を卒業した先輩が、文教大学の子育て教育地域支援センター「文教ペンギンルーム」の紹介をしてくださいました。ペンギンルームは、どの御家庭も利用することができ、週1回集まりがあります。ペンギンルームでは、遊び空間を工夫した活動もしています。この活動では、広めのホールを中心に大きな台を置き、壁側に子どもも大人も乗れる車輪付きの大きなブロックをたくさん置いています。この仕掛けにより、お友達と遊ぶことが苦手なお子さんも、自然とお友達とブロックの車に乗ったり、中央の台の上に協力してお城を作ったりするそうです。

遊びの空間をどのように作るかは、子ども達の成長のために、とても重要です。講義の中で、教授の先生から「渡部さんの幼稚園も、遊びの空間にいろいろな工夫がありますね。紹介していただけますか。」ということでしたので、保育室の空間について、お話をしました。

聖ミカエル幼稚園の保育室は、保育室内がコーナーに分かれています。入ってすぐにおままごとコーナー、その隣に積み木コーナー、パズルコーナーがあり、奥には、お集まりができる広めの空間があります。自由遊びの時間には、そこに、2~4つのテーブルを出して、ビーズ遊びや折り紙、粘土など細かい作業ができる遊びが用意されています。4人ぐらいでやるボードゲームが置かれているときもあります。子ども達は思い思いに自分の好きなコーナーで遊びます。空間が仕切られていることにより、やりたいことが一緒の子どもが集まるため、そこに自然とコミュニケーションが生まれます。

年少さんの遊びに入ったことがあります。おままごとコーナーでは、子ども達は、それぞれに私に「はい、カレーライス。」「はい、ジュースどうぞ」と持ってきてくれます。私はそれを「ありがとう」と言って、自分も食べる真似をしてから、「〇〇ちゃんもどうぞ」と、お隣にいた子どもに渡します。すると、その子も私と同じく食べる真似をします。何となくですが、そこにつながりができます。年少さんは、大人を介して、お友達同士が繋がっていくのです。年中さんになると、大人を介さなくても、お友達と「一緒にいること」をだんだん、楽しむようになります。年長さんになると、お友達を強く意識するようになり、ボードゲームも、おままごと、遊びの中の自分と相手の役割をよくわかったうえで、遊びを楽しめるようになります。

年長さんは、個々のお友達とのつながりだけでなく、年長集団として

の結束もとても強くなります。もうすぐ運動会ですが、年長さんの「よさこい」は、見ていても身震いするような迫力があります。これは強い結束がなければ生まれないものだと思います。このように、運動会では、日々の練習の成果だけでなく、日々の先生たちの保育の成果を見ることが出来ます。年少さんは、やっと幼稚園に慣れて頑張っている姿を、年中さんは少し大きくなって難しいことにもチャレンジする姿を、年長さんは幼稚園生活の集大成の姿をどうぞご覧ください。

園長 渡部 良子

キリスト教保育

7月の暗唱聖句

「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない」

(詩編23:1)

このところ本屋さんでよく立ち寄るのは、いわゆるミニマリストとか、少ない物で豊かに暮らすという生活の実践例を紹介するコーナーです。そういう本に載っている写真は家の中が本当にすっきりしていて、我が家のカオス状態とは雲泥の差を感じます。いわゆる「もの」を持つ、整理するということについて、どうして人によって行動に違いがあるのか不思議な気がします。

しかし、これはものが過剰にある国にいるからこそその現象であって、このことで悩む人は、地球上で一握りの人々でしょう。同時に、きっと誰もが認めるであろうことは、本当になくしてはならないもの、生きるためにどうしても必要なものは、それほど多くないということではないでしょうか。それが分かっているながら、カオスから抜け出せないのが辛いところです。

「わたしには何も欠けることがない」という言葉は、わたしたちに生きることの原点を指し示します。自分を満たし、安心をもたらすのは周囲の「もの」や製品ではないという、一種の悟りの境地を思わせます。たとえ自分自身は弱くても、ものによって武装し、安心を得ようとしなくてよい、むしろ信頼に足る「羊飼い」のような大きな存在が自分を守り、養ってくださることを知っている者の言葉に違いありません。

次に何を持つか、捨てるかよりも、はたして必要なものは何なのか、根本に立ち帰って、私も考えてみたいと思います。

チャブレン 司祭 下澤 昌